

---

## 【シンポジウム】三池争議と向坂逸郎

---

### 開会にあたって

ただいまご紹介いただきました所長の五十嵐です。本日のシンポジウムの開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

私ども大原社会問題研究所は1919年に大原孫三郎の手によって創立され、2009年に創立90周年を迎えました。1949年に法政大学と合併いたしまして法政大学大原社会問題研究所となっております。

創立の翌年である1920年に『日本労働年鑑』を発刊し、以来、今日まで刊行を続けております。戦時中10年間のブランクがありますので、今年2010年でちょうど第80集を刊行する運びとなりました。

今回の一連の催しは、この『日本労働年鑑』第80集の刊行を記念するという趣旨で企画されたものです。ポアソナードタワー14階では「三池争議と向坂逸郎」のテーマで展示会を行っております。10月16日には映像展を開催し、3本のドキュメンタリー・フィルムと映画を上映して、100人の方にご参加いただきました。翌17日には、映像ミニ・シンポジウムを行い、こちらには40人の方にご出席いただき、いずれも大きな成功を収めました。この場を借りて、ご参加いただいた方にお礼申し上げます。

本日のシンポジウムは、この一連の催しの掉尾を飾るものです。最後までご協力いただきますことをお願い申し上げます。

さて、今年は1960年の安保闘争、三池争議から半世紀という区切りの年に当たっております。この節目の年を記念することも、今回の趣旨の一つでございます。とりわけ、私どもの研究所が多くの資料を収集・保管しております三池争議ですが、1959年12月10日、1,278人に対する指名解雇の発表によって始まります。この指名解雇者の中に約300人の職場活動家が含まれていました。これらの人々は、それに先立って華々しく闘われた三鉦連の「英雄なき113日の闘い」の中で鍛えられた活動家たちとして、その人々に対する指名解雇は労働者の大きな憤激を買い、直ちに争議に突入することになったわけです。

翌1960年1月25日に全山ロックアウトが敷かれ、組合側は無期限のストライキに突入します。その後、3月29日にスト中の労働者の1人、久保清さんが右翼暴力団によって刺殺されるという事件が起きます。7月17日には、全国から集まった労働者約10万人がホッパー前で大集会を開く、などという取り組みがありました。

その後、流血の惨事を懸念した中央労働委員会の藤林会長が斡旋に乗り出して斡旋案が提示され、これを組合が受諾し、無期限ストライキは解除されました。11月1日に職場復帰・操業再開という経過をたどる。このようにして、282日にわたるストライキが終結し、三池争議は終わります。

以上のような三池争議について、ここで5点指摘しておきたいと思います。

第1に、三池争議は雇用を守るという労働運動の原点を示すものであったということです。今、

どうして三池争議を取り上げるのかという声がありました。「いまさら何を」という感想を抱いた方もおられたと思います。三池を「ミツイケ」と読む方もおられ、「ああ、時代は遠くなったんだ」との思いもします。

しかし、「いまさら」という方には、ぜひ展示会にある炭労のポスターをご覧になっていただきたいと思います。そのポスターには何と書かれているか。「戦争と失業のない日本を」というスローガンが書かれています。失業・雇用問題は今日の日本において、まさに取り組まなければならない現実的課題にほかなりません。雇用・失業という課題を掲げた三池争議こそ、今日的な運動の先駆ではなかったかと思えます。

第2に、もう一つの労働運動の原点である労働者の連帯が極めて明瞭に示された運動であったということです。自分の利益にならなくても仲間の雇用を守るために闘うという連帯の精神こそ、今日の労働運動が失いかけているものでありまして、この機会にぜひ現役の労働組合の活動家や運動関係者に思い起こしてもらいたい点です。

「総資本と総労働の対決」「戦後日本労働運動の関ヶ原」と呼ばれた三池争議は大きな運動の盛り上がりを示しますが、それは総評と炭労が全面的にバックアップして全国的な闘争になったという点に、また安保闘争とも結びつき、全国的なエネルギーの発揮によって支えられたという点に、大きな特徴がありました。労働者の連帯が生み出した壮大な叙事詩こそ、三池争議だったのではないのでしょうか。だからこそ、人々の魂を揺さぶるような大きな感動が、そこにはあったのではないかと思うわけです。

第3は、安保闘争と三池争議は、はたして敗北したのかという点です。新安保条約の批准、藤林幹旋案の受諾と解雇の実施という点からすれば、その時点では負けたわけです。しかし、長期的歴史的なスパンから見れば、必ずしも負けたわけではないということを、ここで強調しておきたいと思えます。

これは一つの仮説ですが、安保闘争は保守政治の転換を促し、「寛容と忍耐」という池田政権を生み出しました。国民的な運動の高揚によって、戦前型統治の復活を狙った岸政権を倒し、それを阻むことに成功したといえるのではないのでしょうか。

三池争議もまた、企業経営者の反省を促し、指名解雇を避けて終身雇用慣行を定着させるという、その後の日本的雇用慣行の大きな枠組みをつくるうえで重要な意味を持ちました。労働者の雇用を守るという点では、大きな成功を収めたのではないかと思うわけです。

第4に、労働組合、労働運動の弱体化がどのような問題を生み出すかということを振り返る機会にしてもらいたいということです。これも一つの仮説ですが、三池労組の弱体化は、その3年後、63年11月9日に発生した大炭じん爆発を生み出すことになったのではないのでしょうか。国労の弱体化がJR西日本の福知山線での列車脱線転覆事故を生み出したように、あるいは『沈まぬ太陽』で描かれた労働者いじめの攻撃が日本航空の御巣鷹山での惨事を生み出したように、労働組合や労働運動の弱体化は、それに引き続く大きな災害を生み出す一つの背景をなすということを、このような歴史からしっかりと学ぶ必要があるのではないかと思います。

労働運動は企業や資本主義システムの過ちや暴走への警鐘であり、ブレーキであります。労働組合は労働者のためにあるだけでなく、健全な企業経営のためにも欠かせない存在なのだとい

とを、ここで強調しておく必要があるでしょう。その破壊や弱体化は、企業だけでなく資本主義社会のあり方をもゆがめます。労働組合や労働運動が弱体化した結果、今日の日本全体がゆがんでしまったのではないだろうかということを、この機会に考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

5点目は、本日のシンポジウムのもう一つのテーマである向坂逸郎氏についてであります。向坂氏は蔵書家として知られており、生涯をかけて7万点以上に及ぶ膨大な本を集めました。これを私どもの研究所は寄贈していただき、「向坂文庫」として公開しています。ご寄贈いただきましたことに対して、この機会にお礼を申し上げますとともに、ぜひ、皆さんにもご利用いただきたいと思います。また、向坂ご夫妻がお住まいになっていた旧居の跡地は法政大学に寄贈され、この秋、向坂逸郎記念国際交流会館として新しい建物・施設が竣工することになっています。

三池争議では、「向坂教室」が大きな役割を果たしたといわれますが、それをどう見るか、評価はさまざまです。向坂逸郎氏が果たした役割についても毀誉褒貶があり、はたしてどうなのかということは、今も大きな論争的なテーマになっています。向坂逸郎の真実を探るといのが本日のシンポジウムのもう一つのテーマでして、そのための手がかりが得られれば幸いです。

以上、報告を聞く前にちょっとコメントのようになりましたが(笑)、本日のシンポジウムの報告と討論が実り多いものとなりますことを願ひまして、また、参加者の皆さんの最後までのご協力をお願いいたしまして、開会にあたりましてのご挨拶に代えさせていただきますと思います。最後までよろしくお願いいたします。(拍手)

2010年10月23日

法政大学大原社会問題研究所 所長 五十嵐 仁

日本労働年鑑 第80集刊行・三池争議50周年・法政大学向坂逸郎記念国際交流会館竣工記念

**資料展示会**  
10月13日◎～10月23日◎  
法政大学南ヶ谷キャンパス  
ボアゾードタワー14階【資料展示室】  
展示時間：10:00～18:30 【入場無料】

**映像展**  
10月16日◎  
法政大学南ヶ谷キャンパス  
外濠校舎5306教室  
上映時間：13:00～18:00 【入場無料】

**映像ミニシンポジウム**  
10月17日◎  
法政大学南ヶ谷キャンパス  
ボアゾードタワー14階【資格課程共有実習室】  
時間：13:00～16:30 【入場無料】

**シンポジウム**  
10月23日◎  
法政大学南ヶ谷キャンパス  
外濠校舎5306教室  
時間：13:00～17:00 【入場無料】

**三池争議と向坂逸郎**

主催：法政大学大原社会問題研究所  
〒154-8508 東京都目黒区目黒3-12  
TEL: 042-293-2306 / FAX: 042-293-2311  
http://ohar.org

後援：(株)労働社  
〒112-8615 東京都文京区目白台2-14-3 労働社ビル  
TEL: 03-3943-9911 / FAX: 03-3943-8396  
http://www.janpsha.com/

協力：大牟田市立博物館、大牟田市石炭産業科学館、法政大学資格課程委員会、相伝誠・文子

---

## 【シンポジウム】三池争議と向坂逸郎

---

あいさつ

向坂さんの奥様であったゆきさんからは、大原社会問題研究所に全蔵書を寄贈いただき、向坂文庫が完成しただけではなく、ゆきさんは亡くなるときに、向坂さんのお屋敷を法政大学に提供してくださいました。しばらくは、そのままになっていたのですが、昨年度から工事を始めまして、つい先日、竣工式を行って、12月から外国の研究者が11人入居することができる国際交流会館ができあがりました。

いろいろな希望があったのですが、建物自体は残すことはできなかったのですけれども、中にあったさまざまなものをパネル形式で残して、それから図書室自体はそのまま残すということで、現在のような形になりました。ぜひ何か機会があればご覧いただきたいと思います。

三池争議は私がちょうど大学1年生、60年安保の年でもありまして、当時の学生運動の一環として、何回か支援という名のもとに参加をした経験があります。そのなかで、展示されているホッパー前の写真などを見て、感慨を深くしているところです。

その後、早川征一郎さんが著書『イギリスの炭鉱争議』にまとめましたが、早川さんと同じ時期に、1984年から86年まで、私はイギリスにたまたま留学しておりまして、そこで大炭鉱ストライキにちょうど遭遇しました。ロンドンに住んでいながら、車でヨークシャーにばかり行っているような生活をして、イギリスの炭鉱労働者の闘いと三池とを連関させてみて、やはり炭鉱労働者の共通性を感じました。

一つは共同意識といえますか、地域意識が共通している。それから、闘いの主力は主婦会であると思いました。イギリスでも主婦会の運動が大きな力を持っていました。それから、これは向坂さんと大いに関係があると思いますが、イギリスの炭鉱労働者の運動の基礎にノーザンカレッジというコミュニティカレッジの大学が存在していました。専門学校に近いと思うのですが、それが実質上の運動の中心部隊の教育を担っていて、三池の向坂教室と非常に似たようなかたちをとっていたのではないかと思います。

そういう意味で私はアメリカをあまり研究していないのですが、イギリスと日本を見る限り、炭鉱労働という非常に劣悪な労働条件の中で働く労働者の権利意識というものはかなり全世界、共通項があるのかなという感じを持っております。

今日三池炭鉱と向坂教室、どういう連関でお話しになるのか。私は、平井さんは昔から知っているので本などは読ませていただいていますので詳しい話を聞けるのではないかと思います。ぜひ皆さん方もこれを機に、大原社会問題研究所は古い歴史ばかりではなく、新しい問題意識と共通項を持って、いろいろな問題に取り組んでいることも理解していただければありがたいと思います。

本日は多くの方にお集まりいただきまして、ありがとうございました。(拍手)

法政大学総長 増田 壽男